

文化・芸術

「少女」

1927年、油彩、カンバス
55・0cm×46・0cm
(神崎貞子氏、板倉剛氏寄贈)

板倉 鼎 (1901〜29年)

柔らかな下描きの線が透けて見えるほど、みずみずしい色彩が魅力的です。本作は、「垣根の前の少女」(千葉市美術館蔵)の制作過程における一作と考えられています。制作当時、妻で画家の須美子が妹・弘子に宛てた手紙には「垣根の前の少女」に取り組む板倉鼎の様子が丁寧につづられ、本作の背景をうかがい知る手掛かりとなります。少女が口にくわえているのは、弘子から送られた孔雀草くわんそうと思われる草です。

板倉鼎は、1920年代後半にパリへ留学し、28歳の若さで早世した画家です。同時期のパリには、美術学校の同期である岡鹿之助(1898〜1978年)らもおり、鼎の作品は画友たちの手によって日本へと持ち帰られました。ご遺族により大切に保存され、当館では2021年度、油彩・素描10点の寄贈を受けています。昨年には大規模な回顧展も開催され、再評価が進んでいます。(小此木)

名画の扉

大川美術館コレクション展
「『エコール・ド・パリ』の時代に学んだ画家たち」から

